

氏名	池田有隣 いけだゆうりん
学位の種類	工学博士
学位記番号	論工博第429号
学位授与の日付	昭和46年5月24日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	病院施設の建築計画手法に関する研究

(主査)
論文調査委員 教授 西山卯三 教授 巽和夫 教授 増田友也

論文内容の要旨

本研究は、病院施設の建築計画をすすめる手法に関連した研究で序章及び2部5章と結章よりなる。

序章は病院施設と地域社会との結びつき、ひいてはそれと人間生活個々とのかかわりあいがある施設の建築の成立にどのように関連するかのべて著者の研究態度をのべている。

第I部は戦前わが国の医学の発展に関係がふかく、戦後の復興過程が類似する西ドイツにおける病院建築の実態と計画の方法論及び事例を研究したもので、第1章は西ドイツの病院施設を概観し、日本の方が西ドイツよりも施設総数は多いが、人口当りでは伯仲し、特殊病院は少なく、都市集中の現象がめだつことなど、日本との比較をおこなっている。

第2章は西ドイツの病院施設について、現地で分析・検析を加えたもの33施設、文献によるものをふくめて42施設に対し事例的な建築計画からの考察をおこなったものである。地域的には、西ベルリン(4)、ノルドラント、ウエストファーレン州(4)、フランクフルト A. M. (6)、ストットガルト(5)、ミュンヘン(3)など各地にわたり、総合病院のほか、精神病院、災害院病、小児病院などもふくまれている。

第3章は、上の事例研究と文献資料による研究にもとづいて、計画の方法論を明らかにしようとしたもので、本論の中心をなしている。全体計画に関しては建築敷地、立地、計画プロセス、機能図、建築形態・型、拡張計画の可能性などをのべている。建築形態・型については建築概形の類型化と施設内容の配置構成の型分類をこころみている。病棟部については看護単位、建築的構成、面積・寸法構成、IC看護単位、特殊看護単位などについて、特に病室の面積、巾のとり方、看護単位平面の規模構成などについて数値的な検討を加えている。診療部に関しては、診療施設の構成内容、入院受付、救急部、放射線部、検査部、手術部、分娩部、物療部等の各項について主として定性的な面からの平面構成を論じている。そのほかサービス部、管理部、大学病院、リハビリテーションからプレファブリケーション、建築費の問題等にも論及している。

第II部は西ドイツ以外のヨーロッパ各国と新中国についての考察である。第4章は第I部と同様の分析

を西ドイツのものと対照しつつすすめている。西ヨーロッパ諸国について現地調査をおこなったオーストリア、イギリス、スウェーデン、デンマーク、フランス、オランダ、スイス、イタリア等19の施設のほか、手術部計画については文献によって19施設を検討している。このうち特にイギリスではニュータウンなどにおける地区中心施設のあり方を、北欧諸国では機能性と意匠面における人間性を、オーストリアとスイスではドイツの影響の多いことなどが指摘されている。

第5章は中国における病院施設を文献によって研究したもので、ここでは世界各国の状況をよく研究して広い視野をもって施設が計画されていること、漢法医療の活用、また広大な敷地とめぐまれた環境をあたえられていることが指摘されている。

結章は以上の研究に基いて、病院施設の建築計画手法を比較方法的に考察してまとめたもので、まずイギリスの医療組織網とスウェーデンのグルーピングによる協力体制とが注目され、地域社会における病院のもたされている役割によって計画が根本的に異なってくることを指摘している。ついで全体計画では1病床当りの規模が比較され、いずれもわが国と格段の差のあることが示されている。施設の内容構成では建築形態、ブロック・プランにも及んでいるが、適度な集約性を有するイギリスの場合がわが国にとって参照しうるものであるとのべている。病棟部については看護単位のまとめ方を問題として、看護グループによる小単位と管理ユニットとしての大単位の複合並置構成による方法を評価している。病棟の構成については1病床当りの面積、病室の巾等を論じているが、いずれの点でもわが国の現状と格段の相違があることを明らかにしている。そのほか診療部、サービス部、管理部等についても比較が詳細におこなわれ、彼我の相違があきらかに指摘され、わが国の病院施設計画において考慮すべきさまざまな問題が指摘されている。なお今後の病院施設計画とその研究に有益な資料として各事例の図版ならびに文献が別冊としてまとめられている。

論文審査の結果の要旨

わが国の医療施設は戦前ドイツを主流として、西洋医学が移植されたことと関連し、その影響をつよくもっていたが、第2次世界大戦後アメリカの病院建築の影響をつよくうけるにいたっている。しかし近年、その反省期に入り、再び全世界的視野が求められるにいたっているが、著者は戦前におけるわが国との関連、および戦後の復興過程の類似という点で西ドイツを中心にヨーロッパ諸国の最近の病院建築の計画手法を実地調査と文献研究によって明らかにしようとして、この問題にとりくんだ。

建築施設計画について、つかわれ方の実態調査による研究は重要な意味をもっている。わが国における病院建築の計画に関する研究はすでに数多くの実績をつみかさねているが、従来この種の研究は、東京を中心とした個々の施設についての研究が多かった。著者はこれに対して実証の視点を関西地方におき、その上でヨーロッパ滞在中の研究期間を利用してこの研究をすすめた。

著者が実際調査をおこなった施設をふくめて合計80施設に及ぶ別冊にまとめられた病院施設の図版及び資料は、それ自身病院施設計画の重要な参考資料として評価されるものであるが、著者はこれらの多数施設について実地調査及び文献による事例の考察を通じ、我々のもっている計画方法と比較検討をおこなった。その過程で病院施設と地域社会との結びつき、施設の成立の仕方から、施設の地域的配置の問題、建

築敷地、立地の問題、計画のプロセス、機能図、建築形態とタイプ、拡張計画、さらには病院施設のディテールについては病棟部の構成、看護単位、病室の面積や寸法、あるいは診療部の施設内容、サービス部、管理部の各施設などについて、くわしい比較方法的な検討をおこない、病院施設計画において参考とすべき資料を整理すると共に、国や地域による施設計画の特徴点を整理している。これらの研究の結果、西ヨーロッパ諸国における水準が、わが国のそれと格段の相違のあることを明らかにすると同時に、例えば地域計画に関してはイギリスの医療組織網とスウェーデンのグループングの協力体制が注目されること、全体計画の点では適度な空間集約性を有するイギリスの場合がわれわれにとって参照しうるところがあることなど、わが国の病院施設計画が学び参考とすべき各国の施設の特徴を明らかにしている。

以上を要するに、本研究は独創的な知見を呈出するという種類のものではないが、人間の生活慣習と知恵の蓄積の上に発展させられる生活空間づくりの仕事というべき建築施設の計画研究の領域において、きわめて重要な既存の事例の現地調査・比較分析という方法によって、わが国病院施設の計画について重要な寄与をなすものであり、学術上・実際上貢献するところが多い。

よって、本論文は工学博士の学位論文として価値あるものと認める。